

## ライプニッツを読むブロンデルの実体的紐帯論

実在論との区別が消し去られた観念論を求めて

三浦隼暉(東京大学)

『行為』(1893)で知られるモーリス・ブロンデル(Maurice Blondel, 1861–1949)が、それと同年に提出した論文「*De vinculo substantiale et de substantia composita apud Leibnitium*」は、G. W. ライプニッツが実体の複合的結合を説明するために晩年の書簡において持ち出すことになった「実体的紐帯(Vinculum substantiale)」という概念に関する重要な研究のひとつである。同時代のラッセルやクーチュラによるライプニッツ研究が、どちらかといえば、その汎論理主義的側面や観念論的側面に着目したものであったのに対して、ブロンデルによる研究が示しているのはライプニッツ哲学におけるある種の実在論的なあり方であった。1980年代以降のライプニッツ哲学研究の生物学的転回をうけて、近年では盛んにその実在論的側面が注目を集めることになっており、ブロンデルはそうした解釈の先駆者であったとみてもよいだろう。

さらに重要なことは、ブロンデルによるライプニッツ解釈は単に「実在論」である以上に、本人が「高次の実在論」と名づけるようなものであったという点にある。ブロンデルはライプニッツ哲学が極めて観念論的な前提を有するという事実を重視する。そうした前提の上で実在論へと向かおうとすることが、ライプニッツを「高次の実在論」へと押し上げることになるのである。こうした事態は、ブロンデルが『行為』において次のように述べていたことを想起させるだろう。「徹底的に一貫した観念論は、実在論との区別をすべて消し去り、自らが解決しようとしていた的外れな問いに含まれる人為的要素を取り除くことになる」(*l'action*, PUF, 1973, p. 457)。このような観念論を前提とした実在論を、ブロンデルがどのようにライプニッツ自身の哲学のうちに読み取ろうとしていたのかということも含めて検討する必要があるだろう。

ライプニッツ研究の側から見れば、ブロンデルがライプニッツを読解するさいに、他でもなく「実体的紐帯」概念に着目したことは、注目に値する。というのも、ライプニッツ哲学においては「実体的形相」や「支配的モナド」など似たような概念が多く用いられるなかで、紐帯概念は最晩年にイエズス会派のデ・ボスとの往復書簡において初めて現れる問題含みの概念だからである。デ・ボスとの書簡のやりとりのなかで、紐帯概念はいくらかの変更を被ることになり、こうした点からラッセルは「哲学者の信条というより、外交官の譲歩」として実体的紐帯概念を評価している。

様々な困難を抱える「実体的紐帯」概念に対して、ブロンデル自身は積極的な評価を与えている。それは「外交官の譲歩」のようなものではなく、観念論的なモナドロジーを維持しながら実在論的教義を導入しようとするための「誠実な苦勞」によって出てきた仮説だと考えるのである。たしかに紐帯概念は「ライプニッツ哲学の片隅に置かれた、評判の悪い曖昧なもの」であるが、それでもその曖昧さを乗り越えようとする大胆な人々を「美しく貴重な光へ」導くものであると、ブロンデルは述べている。

本発表が目指すのは、ブロンデルが自身の哲学として提唱する「高次の実在論」にとって、実体的紐帯に関するライプニッツのテキストを読解することは、どのような効果をもっていたのかを明らかにすることである。言い換えれば、どのようにデ・ボス宛書簡のテキストを読めば、ブロンデルのような高次の実在論というテーゼにたどり着くことができるのかを検討する。たしかに、晩年

のライプニッツは紐帯概念を提示することを通して、従来の観念論的哲学からは出てこないような議論を行なっている。しかし、問題はそうした紐帯概念をどのように「モナドロジー」と呼ばれる予定調和を基礎とする観念論的理論に接続することができるのかということであろう。本発表では、こうした疑問から、ブロンデルのライプニッツ読解を吟味することになる。

本発表で主に扱うことになるブロンデルのテキストは、博士論文『行為』に添えられたラテン語論文「*De vinculo substantiale et de substantia composita apud Leibnitium*」および、1930年に改めて紐帯について論じるために出版された「*Une énigme historique. Le « Vinculum substantiale » d'après Leibniz et l'ébauche d'un réalisme supérieur*」のふたつである。また、これらの著作について言及している先行研究としては、日本では増永洋三『M. ブロンデルと近代的思惟』(1992)などがあり、フランスではClaude Troisfontainesによる、ブロンデルの第一のラテン語論文の仏訳が共に収録されている研究書 *Le lien substantiel et la substance composée d'après Leibniz* (1972)などを挙げるができるだろう。こうした先行研究を手掛かりにしつつ、現在のライプニッツの実体的紐帯に関する研究の知見も併せて、ブロンデルによる解釈の特徴を明らかにすることになる。

上述の Troisfontaines による執筆の歴史的経緯に関する詳細な研究によれば、ブロンデルは、学位取得のため『行為』と紐帯論を同時期に提出したが、並行して書かれたというわけではなかったという。むしろ、『行為』がある程度書き上がった後、1892年の3ヶ月ほどの期間で書き上げられたものが、紐帯論であったというのである(ただし紐帯概念への関心そのものはかなり早い段階から準備されていた)。ブロンデル自身が書簡のなかで打ち明けていることでもあるのだが、Troisfontainesの解釈によれば、ブロンデルは自身の哲学とライプニッツの実体的紐帯に関する議論をどのように切り分けるかということに苦悩していた。したがって、紐帯論を書くためには、ブロンデル自身の哲学に対してある程度の明確な形を与える必要があり、その姿が輪郭を結ぶことによって初めてライプニッツ研究としての紐帯論を執筆することができたのである。

以上のような経緯を考えるならば、1893年に紐帯論を提出した時点でのブロンデルは、自らの行為の哲学とライプニッツの実体的紐帯の哲学とをある程度切り離して考えていたということになる。じっさいブロンデルは次のように述べてもいる。「哲学的思考は、イチゴのように「這ってゆき」自ら取り木によって増殖していきます。他の人の精神に根を下ろし、その実体から栄養を摂ることから始まり、その後少し離れたところへと自らを根付く新芽を伸ばし、最後には元の茎から完全に離れるのです。[……]それは私の「紐帯」と「行為」についての話です。私にとって当初は関連性のある問題でしたが、今ではまったく別の問題のように思えます」(Victor Delbos 宛書簡, 1889/5/6, *Lettres philosophiques*, Aubier, 1961, p. 17)。

ところで、こうした「紐帯」と「行為」の問題の切り離しは適切なものだったのだろうか。すなわち、ライプニッツの実体的紐帯に関する解釈次第では、ブロンデル自身が考えていたほど両者の距離は遠くないということも帰結しうる。したがって、本発表が行うブロンデルのライプニッツ読解の分析は、両者の哲学的な距離についても再検討を促すことにもなるだろう。